

不登校生徒対応の取り組みについて

【八王子市立 A 中学校の取組】

不登校生徒の状況

人間関係の構築が難しく、特に中学1年生1学期にコミュニケーションが苦手な生徒はその疲労から出現率が高い。また、学習の遅れから不登校に至る生徒が多く出現している。その他、家庭環境による不登校の生徒が増加してきている。

具体的な取組

①二者面談

木曜日に、担任と生徒の二者面談の時間を設定している。全生徒対象に行い、全員が学期1回は面談を行えるように設定している。

二者面談によって担任と生徒の関係が良好となり相談しやすい環境を作り出す。



②オンライン授業配信

ICT研究部と協力して、学習用端末を活用したオンライン授業配信を行っている。

登校することや教室へ入ることができない日でも、授業を受けることができる。



③受け入れと相談体制

火曜日に、1時間登校はできるが、教室には入れない生徒向けの勉強会を開いて、声掛けを行っている。

また、週1回以上、担任と生徒の連絡日記を通じて心の様子を継続して確認している。

④外部機関との連携

SCや特別支援コーディネーター、特別支援教室専門員、管理職が児童相談所、子ども家庭支援センター、SSW、医療機関など関係機関と生徒や保護者をつなげている。



成果

週1回以上、担任と生徒の一行日記の交換を通じて、担任は生徒の心の様子を確認できている。また、毎週木曜日の特別支援校内委員会で不登校生徒についても情報を共有し、指導の方向性を確認することができる。不登校出現率は前年度より約1%減少。

課題

個別の指導や補習が必要ではあるが、対応しなければならぬ生徒が多く、教員が対応する時間が足りていない。

人と人との関わりから学び合う授業づくり（不登校対応）

【八王子市立 B 中学校の取組】

不登校生徒の状況

・対象生徒は、個別の対応をしている。個別指導支援を、教員、学校と家庭の支援員や学校サポーターなどの協力で進め、クラス復帰を目指した支援につなげている。必要に応じて、民生児童委員や子ども家庭支援センター等への協力要請を行っている。

具体的な取組

・毎週水曜日に特別支援校内委員会（校長、副校長、特別支援コーディネーター2名（養護教諭含む）、不登校対応加配教員、各学年担当各1名、スクールカウンセラー、特別支援専門委員）を行い、不登校生徒等の情報交換（市個票システムの入力、活用）と対応策を検討し、各学年と連携を図っている。

・担任、スクールカウンセラーによる家庭訪問、保護者との面談、手紙等の受け渡しを行う。

・学校と家庭の連携推進事業で支援員の活用等により、不登校生徒の個別対応を行う。また、連絡協議会を行う。

・不登校生徒が安心して登校し、過ごすことができるよう、保健室や相談室等の別室対応の環境整備を行い、個に応じた支援を行う。

・個別指導支援を教員や支援員、スクールサポーターの協力で進め、クラス復帰を目指した支援につなげている。



・別室対応で、各クラスのオンライン授業を受ける。

・確認復習として、「ミライシード」を活用して個別学習を行う。

・不登校生徒の実態に応じたオンライン授業及びオンライン面談並びに個別学習などを行う。

成果

・不登校出現率は、令和3年度から令和4年度に向けて減少している。・継続の不登校出現率は、令和3年度、4年度変化はみられない。

・新規不登校生徒は令和3年度から令和4年度に向けて減少している。

課題

・これからも個別に対応していきたい。

・継続不登校出現率、新規不登校出現率を現状以下になるよう取り組むことが課題である。

登校支援委員会の取組について

【八王子市立 C 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の頃から話し合い活動が苦手で、友達関係を作りにくく、登校できない期間があった。中学校入学後は週に何回か欠席はあるが、教室で授業を受け、学校行事にも参加している。登校支援委員会で情報共有や支援方法を検討し、家庭と連携している。家庭の協力があがり、生活リズムは崩れずに学校生活を送っている。

具体的な取組

学校生活アンケートや Q-U アンケートを実施し、生徒の状況把握と共に魅力ある学級作りにつながる取組を継続して行う。登校支援委員会を中心に生徒理解を深め、多様な生徒を受け止めながら、生徒の状況を把握するとともに、学級活動、班活動、生徒会委員会活動など、生徒が主体となりながら、相手を思いやる心を育てる教育活動の充実を図る。

登校できない生徒に対して、授業の内容を家庭から見るができるように配信を行っている。配信は教室の後方より授業の様子をカメラで撮影しや教員の説明や黒板を映す方法で行っている。



登校支援委員会で加配教員が中心となり、各学年の情報共有を行い、対応策を検討する。担任や学年職員が窓口となり、不登校生徒や保護者と連絡を取り、放課後などに別室で個別指導を行う。また、スクールカウンセラーや外部機関と連携を取り、生徒・保護者の支援を行う。

生徒と担任の二者面談を定期的に行い、学校生活の様子を確認するとともに、日頃から職員に相談できる環境を整える。また、三者面談や保護者と連絡を取り、家庭の状況も把握する。登校支援委員会で情報共有を行い、長期欠席にならないよう早期対応を行う。

成果

不登校対応加配教員を活用して、登校支援委員会で、対応策を検討することができた。また、担任や学年職員以外に加配職員が家庭連絡や家庭訪問などを行うことができた。また、スクール・ソーシャル・ワーカーと連携することができた。

課題

小学校からの継続の不登校生徒もおり、小学校との連携や継続しての支援体制を確立していくことが課題である。

多種多様な要因が原因の不登校生徒の支援について

【八王子市立 O 中学校の取組】

不登校生徒の状況

・不登校特例校として、不安感の高い児童・生徒や多動傾向、起立性調節障害、家庭の養育環境を起因としている児童・生徒、原因がはっきりしないなど多種多様な理由で不登校の要因となっている子どもの対応を図っている。

具体的な取組

・エネルギーが弱く、自己肯定感・自己有用感が見いだせない、前任校で威圧的で声が大きい指導者を見て怖くなり不登校になったなど、個に応じて保護者の協力を仰ぎながら、SCや心理士、諸機関とも相談を行い、声掛けをする言葉にも気遣いながら、分かりやすく具体的なスモールステップの目標を設定し、週1日程度から登校を促し、子供に寄り添いながら取り組んでいる。

・起立性調節障害からなかなか登校できない生徒に対して、保護者と連絡を密にとり子供とも面談を重ね、本人の体調も考慮しつつ相談して登校ペースが作れるよう指導している。また、本人の将来の目標や進路について負担にならない程度に具体的な目標を決め設定し、目標に向けた支援や方法を提案して登校を促している。

成果

・令和2年度以降不登校出現率が15%減少し、学校復帰率が毎年2～5%の割合で高くなっていることより、本校での児童・生徒の指導や対応が子供たちに適切であったといえる。

・多動傾向で、集中力を持続するのが苦手な生徒に対して、医療機関との相談により様々な助言を得て、授業でICTを活用するなど集中力の持続時間を考慮したモジュール学習を取り入れた授業を導入可能な教科で実施している。また、通級指導学級との併用で、本人の課題を明確にしながら個別指導を行うことで周囲との人間関係づくりや人との接し方を学ぶことで、登校を促している。



・クラスに入れなく、また、教科により授業に参加できない生徒が居場所（相談室、プレイルーム、保健室）を活用することで登校できる場合がある。

課題

・登校するのが精一杯である子供が多く、居場所利用率も2～3割と多い。多くの子は不登校期間が長いため未履修がある。魅力ある興味関心を高める授業を実施し、補習等を行っても未履修部分を学校で補い学力の向上を図ることが課題である。

不登校生徒に対する不登校解消の取組について

【八王子市立 D 中学校の取組】

不登校生徒の状況

- ・対象生徒は、中学校での集団活動が苦手なため、学級に入ることが困難である。
- ・学習が他の生徒同じペースでついていくことが困難である。
- ・自分の気持ちをうまくコントロールすることが苦手である。

具体的な取組

週に一度開かれる支援会議で、不登校生徒の状況について確認し、対応策について話し合う。そして、その内容を全教員で情報共有し、全教員が同じような対応ができることを目指している。話し合った内容は、データとして残し、いつでも閲覧できるようにする。

空き教室を利用し、週に3度、登校支援として廊下から中が見えない教室を利用し不登校生徒が気軽に登校できる環境を作っている。



スクールカウンセラーと連携し、親子ともにカウンセリングを実施できるよう、保護者に提案している。スクールカウンセラーはカウンセリングの結果を支援会議等で報告し、情報を共有する。

学校に登校できない不登校生徒全員が、学校の取組か、校外の機関とつながるように支援している。その取り組みにより、家からまったく外出せずに、家族以外の人と関わることがない状態を脱するようにしている。

スクールソーシャルワーカーと連携し、長期間学校に通うことができていない生徒の家庭に、担任とともに家庭訪問を実施し、家庭とスクールソーシャルワーカーをつなげている。

ICT機器を利用し、不登校生徒が教室内の掲示板を確認し、現在学校でどのような学習をしているか確認することができる。また、授業内容によっては家庭から授業に参加できるようにしている。

成果

昨年度から継続して不登校の状態になっている生徒がいる一方で、通学することができるようになった生徒が5名いる。

家に引きこもりがちだった生徒が、家庭訪問に応じるようになった。

課題

- ・家庭の方に学校の支援を理解し協力してもらうこと。
- ・学習に対し、後ろ向きな生徒への支援を行うこと。
- ・関係諸機関との連携

不登校対応加配教員を中心とした不登校生徒に対する組織的対応について

【八王子市立 E 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、1年次1学期のコロナ感染症の休校により友人関係が築けなかったことから教室に入れなくなり、起立性調節障害を発症し不登校となった。別室登校で教員や友人との交流を重ね、適応指導教室への通級継続によって登校への自信をつけ、校外学習等に参加。2年次も通級を続け、3年次から完全に復帰した。現在は学校生活に意欲的に取り組んでいる。

具体的な取組

- ①教員の空き時間や放課後の別室登校（担任、特別指導教室専門員、学校サポーター、不登校対応加配教員が対応）
- ②保護者との週3回の電話連絡、2週間に1度の面談（担任、不登校対応加配教員）
- ③少人数授業の参観（担任、不登校対応加配教員が付き添う）
- ④行事、特別授業（体育祭、合唱コンクール、経営者の方の話を聞く会、総合等）の参観
- ⑤部活動への参加（6時間目に別室登校、部員に迎えに来てもらう）
- ⑥クラスメイトが交代で配布物（登校を促すメッセージ付きの教科連絡）を自宅に届ける
- ⑦スクールカウンセラーへの相談（本人、保護者）
- ⑧学校サポーターへの相談（登校の習慣をつけ気持ちを整理させるため）
- ⑨適応指導教室への通級（「やまゆり」「ぎんなん」の活用）
- ⑩教育相談部会で支援の検討（週1回、管理職・特別支援教室専門員・スクールカウンセラー・不登校対応加配教員・来校時は心理士も参加）
- ⑪学年会で対応の検討、各教科への対応依頼（休んでいる分の補習）
- ⑫医療機関との連携（担任と不登校対応加配教員が医師と面談し対応を相談）



成果

不登校対応加配教員を中心とした教育相談部会で検討を行い、学年会でさらに検討をしたことで、担任だけではなく様々な立場から本人や家庭に寄り添う支援をすることができた。また、適応指導教室を利用したことで登校の習慣が身に付き、本人の意欲を引き出すことができた。

課題

同様のケースが複数名の場合、人的配置が難しく、別室対応や様々な立場からの支援ができなくなるため、不登校加配の教員が不可欠である。

小学校から不登校が続く生徒への働きかけについて

【八王子市立F中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の時から不登校の状況であり、中学入学後も欠席日数は10月末現在で70日以上ある。担任は根気強く毎日電話や家庭訪問で本人に働きかけ、週に1日2時間ほど登校できるようになった。

具体的な取組

1 【特別支援校内委員会（不登校対策委員会）】

毎週月曜日に開催して、生徒一人一人について丁寧に情報交換し、メンバー全員で個別の対応策を講じる。管理職、特別支援コーディネーター、生活指導主任、養護教諭、各学年主任が出席する。



2 【こまめな電話連絡・家庭訪問】

担任は対象生徒が欠席している場合は必ず毎日電話をかけ、繋がらないときは家庭訪問をする。電話では基本的にその日の学校の様子や本人が一日どのように過ごしたかなど、ごく他愛ない内容ではあるが、学校や担任との繋がりを切らせないためにはとても重要なことである。



3 【別室対応】

別室対応を行い、教室に入りづらい生徒には主に担任、学年の職員が別室にて対応し、話をしたり個別学習に取り組んだりして登校に向けての支援をしている。不登校加配教員は直接生徒に関わらない場合であってもそれら教員の補助、支援に回る。

4 【放課後基礎教室（補習教室）】

学力が身に付いておらず、学習が不安に思う生徒に対しては、学校運営協議会と連携して放課後基礎教室を週1回開いている。勉強に対して少しでも自信をもって取り組めるようになることで普通に登校できるように支援している。



成果

上記のような様々な取組により、紆余曲折しながらも少しずつ登校することに関心をもつ生徒が出てきている。個別に対応してくれる先生や大人がいることで、安心して学校に足が向けられ通うようになる。そのような存在の教員は一人でも多い方が支援体制を整えやすいので、加配教員の配置は重要な意義をもつと考えられる。

課題

不登校の原因のうちの一つに「学習についていけない」「遅れをとってしまった」ということがあげられる。それに対して、「学習支援」、「教室復帰に向けた段階的個別指導」が絶対に必要である。しかし、今年度学級減の影響で教員数が減少したことで、個別指導に充てられる人員が足りていない。そのため現時点では支援員の活用が急務の状態である。

関係諸機関との連携とオンライン面談等の活用

【八王子市立 G 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校に入学する前から不登校傾向の生徒で、入学後しばらくは登校を継続していたが、家族関係により自宅での負担が増え徐々に登校できなくなり、1年生後半から2年生最後まで不登校状態が続いていた。

具体的な取組

<担任からの連絡>

担任が週1回以上の連絡を通して

- ・本人と御家族の近況の確認
- ・学校生活全体の様子を報告
- ・本人と御家族の困り感の傾聴
- ・具体的な支援についての協議を行った。

<各会議での情報共有と協議>

担任からの連絡および外部との連携から得た情報と要望をもとに、

- ・生活指導部会での対応策の協議
 - ・いじめ対策委員会での協議
- を行い、状況に合わせて対応策の改善を図った。

<外部との連携>

担任からの連絡で得た情報や要望から

- ・養護教諭との連携
 - ・スクールカウンセラーとの連携
 - ・スクールソーシャルワーカーとの連携
 - ・子ども家庭支援センターとの連携
- を行った。

<担任とのオンライン面談>

状況に合わせた対応策の中で、担任との信頼関係を構築し、担任とのオンライン面談を実施することができ、オンライン面談を通して、担任と顔を見ながら交流を深めることで、徐々に安心感を増し学校に通常通り登校できるようになった。

成果

不登校加配の結果、校務や諸活動での時間的な余裕が生まれ、以上の取組のように各種関係機関との連携・諸会議での共有・担任による家庭訪問やオンライン面談など、組織的な対応が、具体的に行えるようになった。

また、連携が進むことで、生徒の安心感が広がり、生徒アンケートで、96%の生徒が友達のよさを認められるようになり、今年度だけでも、23人中13人の不登校生徒が登校できるようになった。



課題

登校できていない生徒や学校内外で相談を受けていない生徒が存在する。

0名を目指して、具体的な対策を行っていく。

不登校生徒への多面的・多角的支援について

【八王子市立H中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校時から不登校傾向であり、様々なことに不安を抱えている生徒である。特に集団には恐怖感を感じ、人の目を極端に気にする傾向がある。

具体的な取組

【家庭と子供の支援員の活用】

家庭と子供の支援員との面談や個別学習を行った。他の生徒と会うことを極端に恐れているため、登校時間をずらし、昇降口も職員のものを使用し、安心して登校できるようにした。

【SC面談】

SCと定期的な面談の場を設定し、今の気持ちや不安を聞いてもらえることで、学校生活に対する前向きな気持ちが芽生えてきた。また、面談の約束をすることで、登校しようとする気持ちを高めることができた。

【適応指導教室の利用】

不登校加配教員が窓口となり、研究主事・サポーターと連携を密にすることにより、本人の状況把握がスムーズにでき、課題の克服や不登校への取組を進めることができた。

【退職教職員ボランティアの活用】

教職員互助会のボランティア制度を利用し、本人の気持ちを優先したスモールステップによる個別学習を実施した。自分のペースで学習できるため、前向きに取り組むようになり、約束の時間には忘れずに登校できるようになった。



成果

校内委員会での協議を基に、不登校への多面的・多角的支援を検討・実行することで、不登校生徒やその保護者は学校の支援を選択することができ、それが気持ちの安定につながり、登校できるようになった。

課題

校内委員会で更に議論を進め、相談・支援体制を整え、不登校生徒の減少を実現することである。

不登校生徒の登校支援について

【八王子市立 I 中学校の取組】

不登校生徒の状況

- ・対象生徒は、全く学校に登校できない生徒ではなく、何かのきっかけで、学校に来た際には、PC学習（オンライン）やプリント学習に取り組む状況がある。
- ・また、それぞれの家庭と連絡がしっかり取れている状況がある。

具体的な取組

・特に、不登校と不登校傾向の生徒を多く抱える2年生には、今年度から本校が「学校と家庭の連携推進授業」に受かったため、支援員（2名）をあてている。具体的には、学校に来た時の別室指導の補助や家庭訪問（手紙を届ける）等の具体的な取り組みを行っている。

・今後も支援員や学習サポーターの力を借りながら、自学自習を試みたい。主に別室で、プリント学習やオンライン学習で、機会を伺いながら、機会を見て、短時間でも教室の授業に参加できるようにさせたい。



・校内委員会は、実質支援会議であり、かなり綿密な会議である。その支援会議は、校長、副校長、養護教諭、特別支援コーディネーター、特別支援教室専門員、スクールカウンセラーから意見を出し合っているため、具体的で有効な手立てが打てている。また、校内委員会では、不登校加配教員（1年学年主任）も、委員の一人であり、具体的な生徒情報の集約・具体策の提示等を行っている。

・今年度は、担任とスクールカウンセラーが密接に連絡を取り合っている。スクールカウンセラーからの「不登校を題材にした校内研修」は、具体的で実践例をあげてもらうので、大変参考になる。また全教員参加なので、必ず研修の成果を生かすことができる。

・特に、1回「I 中学校に必要な不登校対策」2回「不登校生徒に必要な合理的配慮について」の研修は、大変ためになった。

成果

・3年生不登校生徒のうち、2名は週に1・2回登校できるようになった。登校した時には、PC学習（オンライン）やプリント学習に積極的に取り組んでいる。また、他の登校できていない生徒も連絡を密に取り合っている。

課題

・せっかく登校できるようになった生徒も、教室に入ることには躊躇してしまう。やはり教室に入れることが課題である。